



渡部 賢次さん・しげ子さん(立野)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：5月11日

浪江町が3つに区域再編されたことが残念 —孫たちが帰ることのできる 実家を早く再建したい—

渡部さんご家族は、震災直後、おばあさんやお孫さんたちと8人で親族を頼ってさいたま市に避難し、現在まで生活しています。賢次さんは、東京都内を中心に内装工の仕事をはじめ、もう2年ほどが経とうとしています。お話しは、賢次さんと妻のしげ子さんからお聞きしました。

震災直後の3月14日に埼玉に暮らす弟を頼って、家族8人で避難して以来、このさいたま市ですと暮らしています。浪江では、孫3人を含む家族8人で一緒に暮らしていたのですが、今はそれはかなわず、バラバラの住まいで暮らしています。おばあさんは、浪江では畑で野菜を作っていました。住宅街のなかでは草取りもできず、家の中にもったままです。妻は、近隣のスーパーで買う野菜などの食品の鮮度や質が悪いことをいつも気にしています。浪江の暮らしは本当に豊かなものだったことを町の外に出てみて初め



▲左から 賢次さん、テウさん、しげ子さん

て実感します。私は、内装工のアルバイトをしています。毎朝、東京都内の現場に通勤していますが、いつも混雑した慣れない道のりでの長時間の通勤には本当に苦労しました。とにかく生活のすべてが変わってしまったわけです。私は今回、避難指示区域再編を浪江町が受け入れたことを本当に残念に思っています。浪江町の暮らしは、室原川や高瀬川などの限られた水源に支えられています。線量の高い方からの川の流れば、町全体に影響を与えることにもなります。もし影響が無いと言われても、町民と

してはやはり不安です。私が住んでいた上立野行政区では、この問題を何度か話し合い、町への提言も行いましたが受け入れられませんでした。政府の対応を含め、私たち被災者の声はどのくらい届くのか、戸惑いだけが残ってしまいます。そんな線量の高い、不安な土地にもしも私たちが戻ったとしても、子どもたちや孫たちは来ることはできないと思います。孫たちが帰ってこないような実家なんて意味がない。家族8人で楽しく暮らしていた浪江での日々のことを思い出すと、なぜこのようなことを考えなければならぬのかと涙が出てしまいます。いつまでも迷っているだけなく、これから先のことを決断しなければならぬとは思いますが、踏み込めない日々が続いています。震災から2年以上が経ちましたが、きつとこれからは私たちがとって悩みの深くなる本場の時間がやってくるのだと思いません。浪江の皆さんとのつながりを大切にしながら頑張っていきたいと思います。

浪江のこころ通信

・第24号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

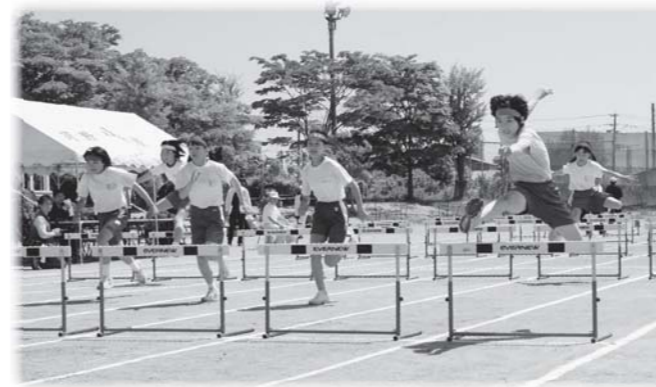
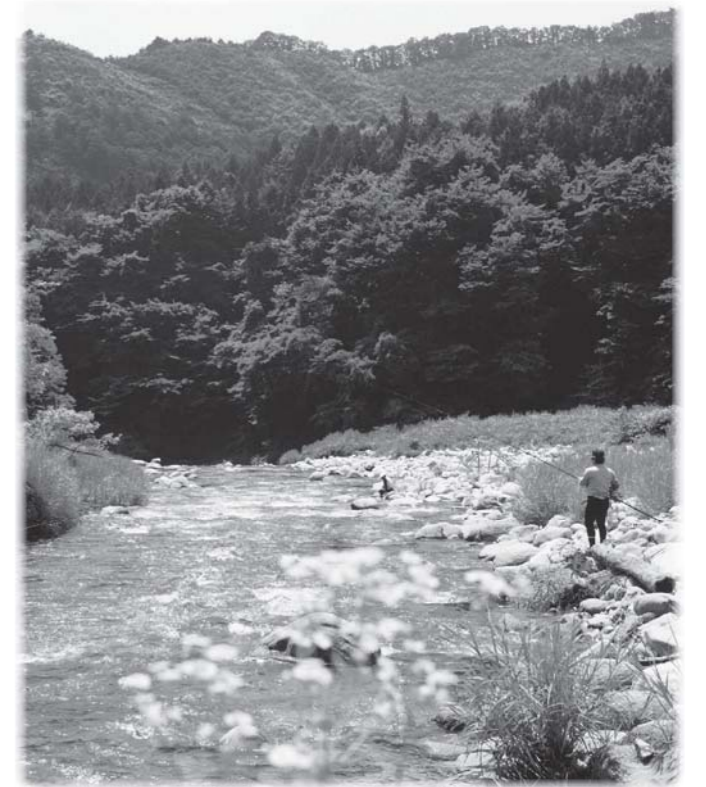
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第24号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218





吉田 直子さん(苧宿)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内・井戸川
取材日：5月8日

前へ進んでいきたい



息子さんと養豚業を営んでいた吉田さん。現在は千葉県松戸市で娘さんとの二人暮らし、前へ進んでいきたいと、野菜づくりを始められました。

豚舎の屋根の上で修理をしていた時、震災が起きました。思わずそのまま屋根にうつぶせになり落ちずにすみました。主人が6年前に亡くなりその後、長男と1,800頭の豚を育ててきました。主人がいない事もあり、日頃から何かの事故が起きた時に備え、気をつけていますが、まさかこのような震災が起ころうとは思ってもみませんでした。

避難するその日、最後の餌を与え、豚舎の扉を全部閉め、こ

れで育ててきた豚がすべて死ぬのだと覚悟し、長男と家を後にしました。14日朝、双葉厚生病院で働いていて二本松の男女共生センターに患者と一緒に避難させられていた三女の顔を見た後、伊達市の従兄弟夫婦の家に向かいました。そこで1ヶ月ほどお世話になりその後、私は次女のいる松戸に落ち着き、現在は三女と2人で暮らしています。長女は流山で看護学校に通い、次男は郡山で働き始め、長男は香取郡多古町の農業センターで働いています。

松戸に来てからパン屋に勤めていましたが、子ども達から「十分働いたのだから好きなことをやれ」と言われたのをきっかけにパン屋を辞め、震災前からやりたかった畑をやるうと思いい立ちました。『田舎で暮らしたい』と小さい頃から言っていた私にとって、風が抜けない都会の生活は辛いものです。しかしこちらに来て知り合った人は皆さんとても親切で、私がいつか、畑をやりたいと話すと、早速あちこちの農家に聞いて下さいました。そのお陰で今は週に三日程

ではありますが、農家のお手伝いをしながら野菜づくりを勉強中です。畑まで自転車で40分かけて通っていますが、畑の作業が楽しみで苦になりません。いつか畑の一角に家を建て、毎日畑仕事を楽しめたいと思います。

震災後しばらくして、逃げ出した豚に家を荒らされたと聞くたびに迷惑をかけて申し訳ないという気持ちでいっぱいになります。一時帰宅した際、豚舎が綺麗に片づけられたのを見た時にも、放射線量の高い場所で作業して下さった方のことを思い辛くなりました。



中村 秀之さん(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：4月28日

子どもたちの成長していく姿が楽しみです



▲左から 暁咲さん、文音ちゃん、安季ちゃん、天音ちゃん

中村さんご家族は、山形市のアパートで皆さん一緒に暮らしています。孫の心優ちゃんも生まれ、にぎやかに過ごしています。

震災当日、私は青森に出張しており、次の日の夜やっと浪江町に帰ることができましたが、もう町には誰もいない状態で、家族とは津島の避難所で合流することができました。妻・明日美の兄を頼り矢吹町に避難し、義理の姉が山形県出身だったことがきっかけで、まず山形県高畠町へ避難することを決めました。そこでは子どもさんがいる浪江町のご家族とも会え、今も連絡を取り合っています。その後、仕事や利便性も考えて2年

前の6月、山形市に暮らすことを決めました。避難当初の荷物は毛布5枚だけ。部屋の中はすぐくガランとしていて、広いねと話したこと覚えていません。今は、子どもたちの学習机や家具も揃い、狭いくらいで賑やかに過ごしています。

浪江町復興支援員の方に、いつも交流イベントに誘っていただき感謝しています。子どもたちの浪江町のお友達は県外に避難している子も多く、大きなイベントの時にしか会えないのが残念ですが、こちらで開催される町の交流会に参加して町の皆さんともいろいろお話ししたいと思っています。楽しむという言葉がふさわしいかわからないのですが、今山形で私たち家族らしく毎日楽しく賑やかに暮らすことを大切に過ごしています。

4人の子どもたちは、それぞれ高校・中学校・小学校・幼稚園に通っていました。避難生活がこんなに長くなるとは思わず、学校のことが一番不安でした。町の友達と離れてさびしい気持ちがあつただろうと思いますが、学校に行きたくないと口にすることもなく元気に通ってくれ、本当に安心しているところです。

機会があれば、浪江町で生活ができることを一番に望んでいます。まだ先のことまでは考えられませんが、子どもたちの成長にとつて、避難後では今が一番良い環境です。町に戻るとしたら、子どもたちが自立した頃に考えようかと思っています。山形県では、認められた理由がない限り、借り上げ住宅の住み替えができないので、これから受験する子どもたちにとつて家の中が騒々しいのが心配なところですね。



鈴木 竹子さん(棚塩)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月10日

なんでこんな目に遭うのかと、 何度も何度も思いましたよ

津波で地区が流され、さらに原発事故からの緊急避難を強いられ、ようやく6カ所目でこの北幹線応急仮設住宅に落ち着かれたそうです。

あの震災から3年目となり、隣近所の方々とも親しくお付き合いが出来るようになり、やっと心穏やかな日々を過ごせるようになったとおっしゃいます。その一方で、18歳で室原から嫁入りしてまもなく太平洋戦争を体験し、そして今、東日本大震災と試練続きの来し方を振り返ることもあるそうです。



■息子をちゃんと褒めてやりたかったと、今更のように思います
大地震が起きた時、息子は現場での用を済ませて帰宅し、孫を幼稚園に迎えに行った嫁はあまりの揺れに途中からやっとの思いで引き返して帰っており、デイサービスに出かけた義母以外はみな一緒でした。なんでもかんだもなく、あの地震の揺れと津波は想像以上にも凄かったです。家族で高台にある棚塩霊園に避難しましたが、地区の水門の係をしていた息子は、家族が引き留めたにも関わらず、責任を感じて海の水門を見に引き返し、

そのまま帰ってきませんでした。そんな最中に原発事故が起きて避難することになり、捜索も満足に出来ぬまま、生き地獄のような思いで消息を待ちました。息子は40日後にようやく発見され、5月初めに二本松で葬儀を行った際には、親の私がびっくりするほど多くの方が避難させているにも関わらず遠方からも弔問に駆けつけて戴き、心から感謝しております。津島の高校、中学校から福島市北高校、嫁の実家のある茨城県日立市、福島の友人宅と転々と避難し、ようやくウイライナワシロ(耶麻郡猪苗代町)で群馬に避難していた娘と合流して約2カ月を過ぎた後、今の住まいに移りました。その間に別々に避難していた義母は小田原で亡くなりました。家族が傍にいない心細さや悲惨さは言葉に尽くせません。

■ここはやはり、仮の住まい。棚塩の皆さんと穏やかに暮らしたい
2011年7月初めに入居しましたが、皆さんがど

この地区から避難されているのかもわからず、朝晩のご挨拶ばかりでしたが、最近はお話を言い合ったり、お茶を交換したりしながら打ち解けることが出来るようになってきました。6、7軒は同じ地区の方がいますし、自宅で皆さんとお茶飲みをすることもあります。また、仮設住宅住民でつくる寿会や習字教室にはよく参加したり、桑折町にある浪江町デイサービスセンターや愛犬を預かってもらっている友人を訪れたりしながら、忙しく毎日を送っています。隣には娘がいますし、日立にいた孫たちも時折訪ねてくれます。ですから、福島市は第2の故郷なのかもしれません。が、それでも、たとえ浪江に戻れなくとも、小さな家でもいいから、同じ地区の人たちと安定した土地で暮らしたいと思っています。またこの機会に、衣食住に全て事欠いていたあの2年前、地元や全国の皆さまに何度も助けて戴いたことに対して、改めて深く御礼申し上げます。



水野 亮汰さん(権現堂)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 天井
取材日：5月10日

今の自分を育ててくれた周りのみんなに感謝し、 自分も伝える側として成長していきたい

震災後、南相馬市や棚倉町に避難後、親戚のいる茨城県のひたちなか市に住むことになりました。現在、亮汰さんとお母さん、お兄さん、妹さんと暮らし、お父さんは茨城県内の少し距離のある場所にお勤めされ、お住まいと職場を行き来しながら過ごしています。

今年、3月にひたちなか市で行われたプロバスケットボールチームリーグJBL2のオールスター戦に被災地の高校生代表として出場を果たし、4点を獲得しました。



▲オールスター戦に出場した際のユニフォーム

震災当日は、中学校の卒業式の後友人と外に出かけている最中でした。夕方、家族と合流し、その後避難しました。避難先で今後の進学のことを家族と考えて、親戚のいる茨城県ひたちなか市に行くことになりました。両親が教育委員会や高校に聞いてまわってくれたこともあり、市内の高校に編入することができました。
今、通っているのは1学年6クラスの普通科の高校です。元々進学を予定していた工業高校で

「良い体験をしてほしい」という顧問の先生の強い勧めもあり、オールスター戦に出場することになりました。試合では、プロ選手と積極的に話ができ、プロ選手の中でもリラックスした状態で楽しくプレーすることができました。
今の自分があるのは浪江や今の学校の先生や友達やいろいろな方のおかげです。たまに寂しくなったり、考えたり、後ろを見るときもあるけど、みんなそれぞれの場所で頑張っていると思うと立ち止まれないし、自分が立

はバスケットは続けずに、勉強や他の活動に力を注ごうと考えていました。が、現在の高校のバスケットボール部は楽しく活動できる雰囲気だということもあり、続けることにしました。部活では副キャプテンを務め、新人戦では県大会に出場しました。先生や友人に恵まれ楽しく過ごしています。

「良い体験をしてほしい」という顧問の先生の強い勧めもあり、オールスター戦に出場することになりました。試合では、プロ選手と積極的に話ができ、プロ選手の中でもリラックスした状態で楽しくプレーすることができました。
今、一番伝えたいことは「感謝」です。それはいつでも伝えられるわけではないし、何かの拍子に伝えられなくなるかもしれない、今、どこにいるかわからない人もいるから、この紙面を通してお世話になっている方に「ありがとう」を伝えたいです。
今後は今までお世話になった先生たちが伝えてくださったように勉強だけではなく、いろいろなことを年下の子たちに教えられる仕事をしていきたいです。
これから先、戻れる時が来たら、中学3年の学園祭の出し物だった映画のロケ地で、遊んだ思い出の詰まった泉田川の土手や浪江町に友人たちと行ってみたいですね。